

1-03 ローイングの魅力，開始の条件

1 視覚障害があってもボートは漕げる

視覚に障害があると、自動車や自転車など陸上の乗り物を自分で動かすのは、なかなか難しいでしょう。ましてや水上のボートは漕げないというのがこれまでの常識でした。「まわりをよく見て安全を確保しなければならない。前の漕手をよく見て正確に合わせなければならない」と。

しかし、発想を変えれば、ローイングは視覚に障害があっても楽しめる、競技できるスポーツです。あのヘレン・ケラーもボート遊びが大好きだったのです。ぜひボートにチャレンジしてみてください。

2 見えなければ漕げない？

いくつかの工夫や発想の転換が必要ですが、クルーボートの漕手に、視覚は必要不可欠ではありません。漕ぐ動作や合わせることに、視覚は、重要だけど必須ではありません。整調であれば、合わせることから開放されます。最終的にクルーローイングは、健常者と視覚障害者の間に、区別が不要の、互角に競えるスポーツです。

舵手、シングルスカル、舵手なし艇のバウでは、支援が必要です。しかし不可能ではありません。直線の競漕であれば、少しの配慮と工夫で、舵手やシングルスカルでも、視覚障害者と健常者を区別する必要などないスポーツに進化させることができる、と確信しています。その時代を開拓していきましょう。

3 いくつかの工夫、配慮すべきこと

視覚障害を持ってボートをする場合の、いくつかの規定、条件、工夫を抜粋しておきます。

- パラ・ロウイング種目では、P R 3に2名の視覚障害者が乗ることができます。
- クルーボートでは、整調を漕ぐだけでなく、他のポジションでも、ユニフォーミティを獲得できる可能性があります。漕手に関しては、視覚障害は（たとえ全盲であっても）不可能用件とは限らず、健常者と区別なく渡り合える可能性が充分にあります。
- 舵手は支援なしには視覚障害で「練習に」従事することはできないでしょう。ただし直線コースでの競漕では、従事できる可能性があります。
- 落水、転覆に備えライフジャケットの着用を強く推奨します。
- 転覆時に、ボートの場所を確認し、接近できる措置が必要です。
- 転覆防止のためには、安定した船型の艇で、リガーにポンツーン（フロート）をつけることができます。
- シングルスカルを漕ぐ場合は、前方をガイド艇が誘導し、本人は静かに聴きながら漕ぐことで対応できます。
- ブレードの向きが握っただけで分かるように、グリップの形状を工夫することができます。
- リギングには補助が必要です。またブレード深さの感触を養成することに、大きな努力を費やす必要があります。しかし不可能ではありません。